

高等図書館の設立趣意書

平成十七年十二月

白川学館

一、マツリゴトの意義と衰微 白川学館

古来、多くの国々には、高い水準における国策を究める場があった。それらは一般に、王族、司祭族、貴族層などに担われていた。

日本においては、二・三世紀ごろの連合国家期の祭政体、四・五世紀ごろの大王家（おおきみけ）の祭祀体制、八世紀以降の神祇官体制などに、その姿が伺える。それは倭語（上代日本語）の「マツリゴト」にはほぼ重なる。後代には政治のみを指したが、元来は奥深い内容を保っていた。

それは、国家、民族、種族、更には神祇、宗教、葬儀・祖霊儀・慰霊、異霊制御、戦術呪法、その他にわたる、高次の策を得る、技と場などを意味していた。

しかし、時代の推移と共に、翳（かげ）りが増す。特に近代を迎え、それらは更なる衰滅を余儀無くされた。維新後の国家形成は、大幅に旧体制を薙ぎ払ったからである。もともと年表を繰れば、明治初年の神祇官再興、昭和十五年の神祇院設置などの事項は目にしえる。しかし、それらは確たる根拠と背景を以って成立したものとは言いがたい。

二、確認と提言

以上から、ここに二点を確認したい。

一、旧世界の衰微せる伝統だが、その核心には、極めて高い価値を見出し得る。

二、二十一世紀には、政・経・軍などの通常の近代的国策とは別に、一層根源的かつ高次の国策を要する。

ゆえに、端的に提言したい。

史上、大きく断絶した、高等国策の機関を、民間水準で創造的に再建したい。

三、提言の補説

(一)、提言の根拠を一層証すべく、若干補う。ただし、弥生末期から律令期に至る煩瑣（はんさ）な流れは省き、ここでは神祇官体制の後世の流れに、やや触れるに停める。

平安中期、神祇伯が伯王家（白川家）に世襲されるに至った事態がある。これは旧体制の縮小を示す。かつ中世には神祇官長上・吉田家による分掌も生じた。この両家の家伝体制のまま、幕末に至っている。

だが明治初年の錯綜せる史流に飲まれて、共に離散の憂き目を見る。伯王家では、幽かに学頭職の者が、孝明天皇の命を奉じて、宮中を離れ、民間に潜行してゆく。昭和の戦後にも、当流のわずかな形跡は窺える。

しかし、微細な埋もれ火の破片ながらも、われわれは、その背後に、古代以来の高等国策にまつわる、壮大な場と時空を察し得る。

そこに、再建を導く根拠がある。

(二)、とは言え、この再建は直ちに復古を指すものではない。マツリゴトは、他面でおしる時代画期を誘う場でもあった。時の要請する形に、深く応えてきた。ゆえに今日において、再建は創造的に究められるべきである。

(三)、かつ、国と民の課題がある。別言すれば、公と私の矛盾である。この背景には、維新以来の複雑な経緯があり、微妙な屈折が潜む。今日、そのねじれの深みにおいて、この再建が企てられることになる。

設計事業の趣旨と内容輪郭

設計事業は、大抵に、基幹、応用、特殊・その他の三種からなる

分野 / 水準	基幹	応用	特殊	その他
調査				
検証 <small>(主に研究委嘱)</small>				
設計				

一、方伎体系の設計

へ主旨へ古代の祭政体に遡る基調に立つ、今日的な体系の創造である。一方で旧世界方式の意を汲みつつ、他方で諸科学の成果（特に量子物理学など）をも組み込んだ体系の設計である。

〈内容輪郭〉

「調査、検証」

・関連の資料・伝承などの調査。
・祭政史・高等神事史など、学者たちへの研究委嘱（考古学、祭祀学、神話学、古代史学、上代国語学その他、多分野の学術を要す）。

「設計」

・旧時代の祭司に相当する、若手伝承者の育成。
・伝承と学術とを、高次に統合する体系創造の試み。
・一定の建造物の獲得。

二、他国・他民族関係策に基づく体系の設計

〈主旨〉 建国因縁（国家形成史的葛藤）を複雑に有する韓半島、古代冊封体制などと絡む中国大陸、列島の基層文化性と絡むユーラシア中央部、および南太平洋世界などが対象となる。 往古と近現代・未来とを包括する、動的体系を創造する。

三、倭国・日本形成史に基づく体系の設計
へ主旨〉 弥生末期ごろからの古氏族、地域政権、その他との複雑な建国因縁などが対象となる。他方で、前記二、との絡みも深い。古社、聖地・聖山などの旧神祇文化的な世界対応の体系化が目指される。

四、その他

応用

右基幹設計事業の展開から、自ずと多様な応用地平が発生し得る。環境、エネルギー、医療、農業、教育、その他への新方策などを提案し得るゆえ、諸々の応用設計が可能である。

特殊・その他

右の両者以外の特殊問題などに対応する設計である。

白川学館

高等因策館設立準備室